

第一次世界大戦とイギリス人の戦場巡礼—ベルギーのイーブルへの旅— The First World War and Battlefield Pilgrimages of the British: Visiting Ypres in Belgium

吉田正広
Yoshida Masahiro

The purpose of this paper is to present an example of "secular pilgrimages", which Ian Reader regards as important in studying pilgrimages, and to consider the meaning of war grave pilgrimages and battlefield tours for the British people. It seems that Ypres, in whose suburbs there are many war graves of soldiers of the British and Commonwealth armies who fell during the First World War, is holy ground for the British people. Menin Gate in Ypres was built with British funds as a memorial for the missing soldiers in the battles at Ypres. On the walls of the gate the names of these soldiers are inscribed. The bereaved visit their son's or husband's grave or the memorial on which his name is inscribed to commemorate him. Many people also visit Ypres as tourists. In this city there are many hotels, B & B's, restaurants and souvenir shops for the visitors from Britain. Some tour companies do business and war-related museums, from small private museums to Flanders Field Museum in the center of the city, exhibit various war-related items. The Anglican Saint George's Memorial Church is the place of worship for British visitors. The city, whose buildings were reconstructed by British money, is itself a memorial of the First World War. Since the 1980s many people have visited it, commemorating those who "gave their lives for king and country", and consequently contributing to the formation of the British national identity. I think that the study of war grave pilgrimages and battlefield tours is a key to understanding the religiosity of the British people, who are becoming "secularized".

現代の巡礼を考える際に、戦争の問題、特に戦没者の追悼は重要な意味を持つのではないだろうか。聖人の奇跡を求めて旅をするローマ・カトリック的な巡礼の伝統が宗教改革を契機に途絶えたイギリスにおいて、巡礼の問題を考察しようとすると、非宗教的な巡礼行為を研究対象にせざるをえないし、また、それを研究対象にすることで、幅広い巡礼研究が可能になる。このような観点は、四国遍路についての詳細な研究を行っているイギリス人研究者イアン・リーダー氏がつとに強調している点でもある。むしろ、リーダー氏は、非宗教的な巡礼行為に見られる宗教性を研究対象として、宗教的巡礼の現代における意味合いを逆照射できると考えているようにも思える。

本稿は、イアン・リーダー氏の巡礼研究の基本的なアプローチの仕方を整理するとともに、そのアプローチの具体例の一つとして挙げられる現代イギリス人の「戦場巡礼」¹⁾の事例を提示し、戦争と巡礼との関係について考察することを目的とする。

I イアン・リーダー氏の巡礼研究

最初にリーダー氏の宗教巡礼に対する考え方から紹介しておこう。

巡礼とは様々な宗教に共通に見られる、宗教文化全般の一般的な現象である。その場合、各宗教には二つの異なった巡礼が存在するとリーダー氏は指摘する。一つは、「国民の文化的境界を越えた、単一の支配的巡礼地」であり、もう一つは、地域的な多様な巡礼地である。たとえば、正教会とローマ・カトリックでは、エルサレム巡礼が前者にあたる。またローマ巡礼も、ローマ・カトリックの一体性の象徴と位置づけられる。これに対して、ヨーロッパ各地の聖人を中心とする巡礼地や、聖母マリアの巡礼地は後者に相当する。

プロテスタント・キリスト教は、聖人の執りなしと関連する特定場所への巡礼に反対するが、しかし巡礼

概念は存在している。例えば、プロテstantであるイギリス国教会の中には、アングロ・カソリックと言われる一派があつてローマ・カトリックに近い特徴を持っているが、彼らによってウォルシンガムやグラストンベリーなどの巡礼が復活し、組織されている。また、福音主義の伝統の内部においてもまったく巡礼がないわけではない。アメリカ・プロテstantの農村的で血縁的な信仰復興集会や礼拝集会がある。さらに、個人の人生を巡礼と見る見方がある。ジョン・バニヤンの『天路歴程』（原題では「巡礼者の進歩」Pilgrim's Progress）に典型的に示されるように、個人の人生としての巡礼概念である。バニヤンの小説は、主人公クリスチャンが信仰と敵対的な現世の様々な誘惑や危険を避けながら天の門に至る物語であり、クリスチャンの人生そのものが苦難の道、すなわち巡礼なのである。

このようにリーダー氏は巡礼の多様性に注目する。キリスト教やイスラームの巡礼には2種類の巡礼がある。支配的な大巡礼地と地方の様々な巡礼地である。キリスト教ではイエルサレム巡礼とローマ巡礼が前者に相当し、それ以外の各地の巡礼地が地方の多様な巡礼地となる。イスラームでも、メッカ巡礼と、各地の聖人の巡礼地の2種類がある。また、人生としての巡礼概念も存在する。さらに、仏教、ヒンドゥー教にも豊かで複雑な巡礼文化がある。リーダー氏が注目するのは、このような多様な巡礼である。

さらにリーダー氏は、公式宗教の靈廟や聖地への巡礼以外の、様々な形態の世俗的巡礼に着目する。サッカーフィールド、有名作家の墓、ポップスターの墓、戦争墓、ディズニー・ワールドなど、様々な世俗的巡礼地があげられている。特に「旅行者は半ば巡礼者である」というヴィクター・ターナーとエディス・ターナーの考え方によれば、観光旅行は近代的世俗的形態の巡礼であると位置づけられている。近代の観光は、精神的・肉体的健康や、社会的地位、多様で異教的な経験など、近代における信仰においては、すでにあきらめられた価値観がもたらされるのである。また、スターリン時代初期ソ連や、中国、キューバなどへのヨーロッパ人の訪問も「政治的巡礼」と位置づけられる。「社会正義の理想に基づくような新しい文明の靈廟での礼拝」（マーガリー『ロシア巡礼』）である。

過去の文学者の足跡をたどる「文学の旅」も世俗巡礼の一つとして説明されている。17世紀日本における芭蕉の旅や、島崎藤村のパリ旅行（1913～1916年）がその具体例としてあげられている。また、故郷を求めてイギリスを旅するアメリカ人は、例えばバイロンの墓を詣でる「情熱的巡礼者」であり、そこには暗黙の宗教性が見られると評価する。また、伝記作家によって「巡礼」の言葉が使用されるが、それも一例として挙げられている。

以上のような世俗巡礼は、日常生活から離れる旅であり、別の世界への入場、新しいことへの探索、あるいはアイデンティティにかかわることになる。これには宗教的巡礼との共通性が見られるというのである。

II 第一次世界大戦の衝撃と民衆による戦没者追悼

次に、イアン・リーダー氏が世俗巡礼の一つの形態として重視する「戦場巡礼」の具体例として、2007年に筆者が実際に体験したイープルへの「戦場ツアー」を紹介したい。それは20世紀イギリスに特有の旅の形態を考察することでもある。

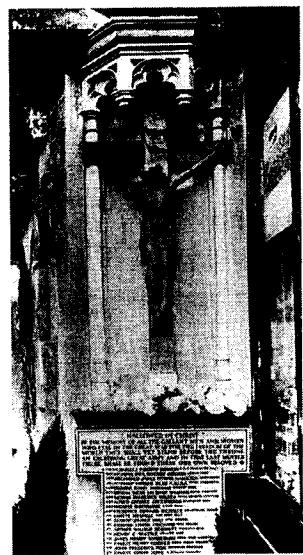
さて、19世紀に「世俗化」が進展したとされるイギリス社会に対して、第一次世界大戦は大きな衝撃を与えた。最愛の人の死に直面した人々は、たとえかつてのキリスト教信仰とは違う形にせよ、何らかの信仰心の高まりを経験した。このような信仰心の新たな展開が、20世紀イギリスに特有の戦場ツアーあるいは戦場巡礼の出発点となる。

第一次世界大戦当初、兵士は志願制で募集された。様々な場での志願を呼びかけるキャンペーンによって、多くの若者が積極的に兵士に応募した。特に教会は、教区教会から司教座聖堂まで様々な形で兵士への応募

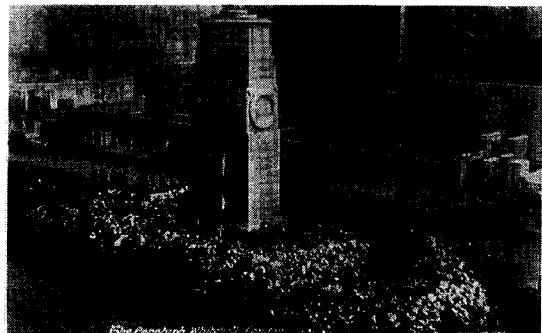
を宣伝した。「クリスマスまでには」帰れるとの当初の期待にもかかわらず、塹壕線が展開して戦争が長期化し、1916年には徴兵制が導入されることになる。また、徴兵制の下で軍務を免除された若い聖職者の多くは、従軍牧師としてやはり戦場に赴き、戦場での礼拝、負傷者的心のケアや戦死者の埋葬に積極的にかかわった。彼らは自らの使命を真摯に実行する中で、兵士たちの間におけるキリスト教信仰の欠如を見いだして、危機感を抱くことになる。これ以後イギリス社会の中で信仰復興に向けて様々な活動を展開する聖職者の多くが、従軍牧師として戦場を体験していた。

また、一方で「銃後」においては、戦死者の遺族の精神的ケアが教区司祭の任務に加わった。そして、1916年に戦争の激化と戦死者の数が増える中、通りに面した教会の壁などに「戦争靈廟」 war shrine や「街路靈廟」 street shrine が設けられ、戦争中からすでに戦没者の追悼が日常的な世界から始まった。1918年11月11日の休戦後は、1919年6月28日のヴェルサイユ講話条約が締結を記念して、

7月19日に戦勝記念パレードがロンドンで行われた。そのパレードのコース途中に、戦死者に敬意を表するための象徴として制作されたのが「セノタフ」であった。戦勝パレードで行進する兵士や水兵、退役軍人たちが、セノタフに向かって敬礼するというものであった。パレードの「小道具」として「一時的」なものとして設置され、撤去される予定であったセノタフは、民衆の巡礼の対象となる。戦勝パレードの後、多くの人々がこのセノタフを訪れた。最愛の人を戦争で亡くした人々は、ロンドンのセノタフに来て花や花輪を捧げることで、戦場に眠っている、あるいは行方不明のままの戦没者に祈りを捧げ、退役軍人たちは死んだ仲間に對して敬意を表した。第一次世界大戦中に始まった「戦争靈廟」や「街路靈廟」の延長として、人々はセノタフに赴き、セノタフはいわば民衆の「巡礼地」となったのである。政府は仮のセノタフを撤去できなくなり、石造の「恒久的セノタフ」の建設を決定することになる。建て替えの際には、「仮のセノタフ」撤去の様子が人々の目に触れないようにおおいをして工事をするという念の入れようであった。セノタフは現在でもホワイトホール通りの真ん中に建っており、毎年11月11日に直近の日曜日が「追悼日曜日」 Remembrance Sunday として指定され、セノタフ前で王室や政府関係者の出席する追悼式典が行われている。



第一次世界大戦中の
街路靈廟



恒久的セノタフに捧げられた花や花輪
(一般の人々が巡礼にやって来る様子)

III 戰場巡礼と戦場ツアー

さて、第一次世界大戦の早い時期にイギリス政府は、戦死者の現地での埋葬を決定した。このような中で、『デイリーミラー』紙の記者から出発し、南アフリカ戦争後のトランスバール植民地などで「イギリス化」を進めた植民地長官ミルナーの下で副教育長などとして活動し、やがてイギリスに戻って『デイリーミラー』紙の編集を担当したフェビアン・ウェナーが、重要な役割を演じた。彼は第一次世界大戦が始まると兵士に志願したが、すでに40歳を過ぎていた彼は兵士としては不適格となった。そのため彼はミルナーの援助によって、赤十字の移動救急部隊の指揮を執ることになった。彼は、戦場において、多くの戦死者が出るなかで、埋葬された兵士の場所と氏名・階級などを記録し、これらの臨時に埋葬された遺体をのちに大きな墓地に改葬する仕事に取りかかった。さしあたりは、できるだけ正確な埋葬場所と氏名・階級などの登録活

動を実施した。やがて彼の部隊は陸軍に所属することになり、1917年には当時の皇太子エドワード（後のエドワード8世）を会長としてウェラーを副会長とする「帝国戦争墓委員会」Imperial War Graves Commissionが国王の特許状によって設立された。以後、この委員会の下で、埋葬地の正確な登録がなされていく。やがて戦局が有利に展開する中で、個別に埋葬された遺体をいくつかの墓地に改葬する仕事が中心となり、墓地の整備や記念碑の建設とその後の維持管理が仕事に加わっていく。

戦争末期になると、フランス・ベルギーの戦場へ旅行する一般人が現れ、戦場の不発弾や遺品などを土産として持ち帰る人々が現れ始めた。1918年11月11日に休戦協定が結ばれると、早くも、戦場や戦場の墓地へ赴く人々が現れた。旅行会社も早くからパック旅行を組織している。例えば、1919年のベルギーのイーブルの中心にある破壊された「絨維会館」の様子を撮影した写真（現在絵はがきとして販売されているもの）には、「戦場へのエクスカーション」と書かれたミニバスが右端に止まり、女性や子供を含むきちんとした服装の人々が散策し、放置された大砲に腰掛けている様子が見える。この人々は右側のミニバスから降りた人々のように見受けられる。1919年にはすでにミニバスによる「戦場ツアー」が行われていたことを示す写真である。

1922年には国王ジョージ5世がフランスやベルギーの戦争墓地を訪れ、旅行のできない遺族を代表して巡礼に訪れた。1928年には英国退役軍人協会 Royal British Legion が巡礼を行った。以後、1930年代末の第二次世界大戦の開戦に至るまで多くの戦場ツアー・戦場巡礼が行われた。



1919年の戦争直後のイーブルの様子と
戦場ツアーのミニバス（右端）

III 現代の戦場ツアー——激戦地イーブルを巡って——

イギリスでは、1980年代以降、第一次世界大戦の戦場や戦争墓を訪れる戦場ツアーが流行した。それは、一般には、戦場経験者や遺族の高齢化によって、一度はかつての戦場を訪れてみたいという欲求や、子や孫の側での親族の経験を追体験したいとの欲求があると言われている。また一方で、第一次世界大戦を始め過去の戦争の記憶の風化に対する懸念もあったと言われている。それに対する対応として、学校での歴史教育の一環として、生徒たちを教師が率いて現地を体験させることも一般に行われている。それを支援する戦場ツアーの主催者側の便宜の提供もなされている。

その一つである英国退役軍人協会主催のツアーの例がある。英国退役軍人協会は、1921年に退役軍人の支援を目的として設立された慈善団体であり、様々な慈善活動を行っている。この団体は「ポピートラベル」という戦場ツアーを企画する旅行会社を運営し、イギリスからの様々なツアーを企画、主催している。その一つとして、「スクールツアー」が用意され、学校の児童生徒のツアーの手配を行っている。また、ツアーの途中で遺族を肉親の墓や名前の刻まれた記念碑に案内して、帰りの交通機関を別個に手配するサービスを提供しており、特にこのような人々のことを「巡礼者」と呼んでいる。2008年8月23～24日の戦場ツアー（イーブル）の日程は以下の通りである。

- 8:00 ユニオンジャック・クラブ（ロンドンの英国退役軍人協会の本部）を出発
- 14:00 カレー出発（イーブル地区へバスで移動）
 - サンクチュアリー・ウッズ、エセックス・ファーム、ヴァンクーバー・コーナーの訪問

20:00 ラスト・ポスト、(メニンゲート)
 イープルの地元のレストランで食事
 2日目午前：ラングマークドイツ人墓地、タイン・コット墓地の訪問
 パッセンデイル記念博物館の訪問
 イープルでの自由時間、セント・ジョージ教会の訪問
 午後：カレーへの出発前の自由散策、途中での買い物
 20:00 ユニオンジャック・クラブに到着

このツアーの費用は164ポンド（日本円で約3万円程度）で、一人部屋希望の場合には20ポンドの追加を必要とする。ドーバー海峡をフェリーで渡るバスツアーであるが比較的手軽に参加できる費用である。遺族の場合には政府から一定の補助金が支給される。すでに述べたように遺族（「巡礼者」）には、目的の墓地や記念碑（名前のある）を指定し、その場に一人で残ることが可能となっている。

このような日程のツアーが典型的であるが、それ以外に個人での旅行も考えられる。イープルのインフォメーションセンターでは現地の「戦場ツアー」を多数紹介している。筆者は、2007年11月12日から15日にかけてロンドンからドーバー、カレー、リールを経由してベルギーのイープルまで、戦場巡礼の跡をたどる旅行をしたが、筆者はインフォメーションセンターで紹介されたツアーに参加した。筆者が体験した「戦場ツアー」は、「オーバー・ザ・トップ・ツアーズ Over the Top Tours」（「突撃旅行会社」の意味）と称する、イギリス人夫婦が経営するミニバン1台による小規模な会社による半日コースのツアーであった。この様子は、別の冊子に詳しく記したので、ここでは簡単に説明しておきたい。

最初に向かったのが「エセックス・ファーム」と呼ばれるイギリス人墓地で、ここは新兵と任務を終えた兵士の交代の場所として使われた、頑丈なコンクリート作りの豪があった。この墓地で最初に案内されたのが、15歳の少年兵の墓で、たくさんのポピーのリースが捧げてあった。また、墓碑が隙間なく並んでいるのは爆弾で遺体の区別がつかなくなったり兵士の墓であるとの説明があった。この日は寒い雨の日で、墓地の足下はぬかるみ、第一次世界大戦の塹壕はこんな状態だったと想像できた。墓地にはすでに別のツアーや会社の参加者（年配のイギリス人女性数人のグループや別の十数人のグループ、写真参照）がいた。また、この墓地には、ジョン・マクレーの詩「フランダースの戦場にて」という有名な詩の碑が建っていた。戦没者の追悼に赤いポピーの花輪をささげる習慣は、このマクレーの詩から始まったとされて



上の写真はミニバスツアーワークの店舗（右から2件目）。右はツアーに使うミニバス



エセックス・ファーム墓地
 (向こうに別のツアーが見える)



ラングマークのドイツ人墓地

いる。

第二の見学場所はラングマークのドイツ人戦没兵士の墓地である。墓石も、個人の名前もない木々に覆われた共同墓地にドイツ兵の遺骨がまとめて埋葬されている。墓地の作られた1920年代のドイツでは、個人よりも民族共同体の理念が重視され、その考え方反映していたと言えよう。また、この墓地は、ドイツ軍の最前線の要塞であり、今でも、隙間から銃を発射したコンクリートブロックの一部が残っている。ラングマークとは村落の名前で、第一次世界大戦時に村人は強制的に立ち退きになった。このドイツ人墓地はイギリス人の「戦場ツアー」で必ず訪れる場所であり、むしろドイツ人の蛮行の象徴を見るという意味があると言えるかもしれない。

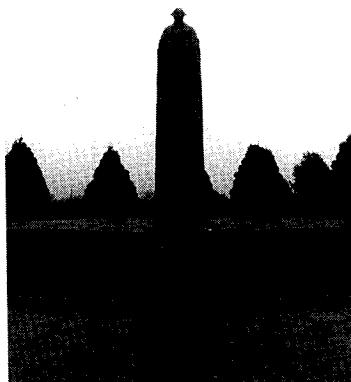
第三の見学場所は、サン・ジュリアン村近くにある「カナダ人記念碑」である。これは10数メートルもある思いにふける兵士像の記念碑である。第一次世界大戦には、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、インドなど、まさにイギリス帝国規模での戦争協力がなされ、多くの戦没兵士がいたのである。

このあと向かったのが、ヨーロッパで最大規模のイギリス兵士の墓地タイン・コット墓地である。専用の駐車場は、イギリスやフランス、オランダなどEU各国のナンバープレートを付けた大型バスでいっぱいであった。併設の博物館には、パネルによる第一次世界大戦の戦況の説明、砲弾や兵士の遺品、召集令状、戦死を告げる手紙など、戦争に関わる様々な品物が展示してある。タイン・コット墓地は、元ドイツ軍の要塞であり、「犠牲の十字架」はかつての要塞の上に建ち、「これは、1917年10月4日にオーストラリア連隊によって奪取されたタイン・コット要塞である」と銘記されている。

最後の見学場所は、かつての塹壕が林の中に保存されている62高地近くの「サンクチュアリー・ウッド博物館」であった。古い建物の中に掘り出された弾薬の筒や武器などが無造作においてあるだけの民間の博物館である。ここでのトイレ休憩の後、イーブルの「書店」に戻ってツアー終了であった。すでに5時を回り、暗くなっていた。

イーブル市内にもイギリス人墓地が2つあり、いずれも静かで緑の芝生に囲まれた大変きれいな墓地であり、庭師による過剰なほどの手入れが印象的であった。イーブルの東側にあるメニンゲートは、第一次世界大戦後にイギリスの資金で建設されたもので、巨大な門自体が戦争記念碑である。壁には、イーブル周辺で戦死した行方不明兵士の名前が刻まれ、1928年以来毎日午後8時、地元の有志によってラスト・ポストと呼ばれる追悼ラッパの儀式が行われている。これも、イーブルを訪れるイギリス人が必ず参加する儀式である。

そのほかイーブルには、英連邦戦争墓委員会の事務所が置かれ、これらの



サン・ジュリアンの
「カナダ人記念碑」



タイン・コット墓地の犠牲の十字架



62高地「サンクチュアリー・ウッド博物館」



メニンゲートでのラスト・
ポストに集まつたイギリス人

墓地や記念碑の維持管理を行っている。また、市内にはイギリス国教会のセント・ジョージ記念教会が建ち、「巡礼者」を迎える教会が用意されている。そのほか市内には、「巡礼者」を受け入れるホテルやB&B、レストラン、土産物店などがあふれている。多くはユニオンジャックやポピーの花を掲げ、まるでイーブル全体がイギリスの巡礼者のための門前町であるかのように見える。

おわりに

第一次世界大戦の戦死者の墓地が近郊に散在し、また行方不明兵士の名前が刻まれた記念碑メニンゲートのある都市イーブルは、現代のイギリス人にとって文字通り聖地である。最愛の人あるいは肉親の墓や刻まれた名前を前にして思いを馳せて心に刻む巡礼者だけではなく、戦場ツアーの参加者も、戦没者の墓や記念碑を前にして目の前に眠っている戦死者に思いを馳せ、心に刻む行為を行う。その限りで旅行者も巡礼者と同じ気持ちになると言われている。そのことは外国人の私でさえ、これほど多くの戦没者の墓や行方不明兵士の名前を前にして、自然に手を合わせ、祈りを捧げることになる。おそらくその瞬間には、私は巡礼者の気持ちを自ら体験するのである。基本的に宗教的な巡礼を行わないイギリス人でさえ、巡礼者と同じ心境になるのではないだろうか。ロンドンから列車とフェリー、さらにはフランス国鉄、ベルギー国鉄と乗り継いで見知らぬ土地で不安な中でようやくイーブルに辿り着いたときの気持ちは、巡礼者の気持ちと同じではないかと思いたくなつた。

すでに述べたように、イーブル市内にはイギリス人巡礼者や旅行者を受け入れる多数の宿泊施設やレストラン、関連グッズを販売する土産物店が点在する。ミニバスツアーを提供する会社がいくつかあり、大小様々な規模の戦争関係の博物館、イギリス人向けの教会もある。墓地や関連の施設が点在する近郊を含めて、イーブルは「フィールド・ミュージアム」となっている。現在のイーブルの都市そのものが第一次世界大戦の破壊のあとイギリスからの資金援助で再建されたのであり、警察署の建物の正面に刻まれた「1914」という数字がそのことを物語っている。

ところで、ここを訪れる人々は決して過去の戦死者だけをイメージするのではなく、イラクやアフガニスタンで死んでいく現代のイギリス軍兵士をもイメージすると考えざるをえない。初等・中等学校での歴史教育や、軍隊の新兵教育として、国民のナショナル・アイデンティティ形成に貢献しているであろうことは容易に想像できよう。「王と祖国のために命を捧げた」兵士たちに思いをはせることで、人々は、イラク戦争に至る現代のイギリス国家が戦っている戦争を肯定する方向へと向かうようにも思える。その意味で現代においても巡礼は政治と切り離すことはできないのかもしれない。

現代の巡礼、あるいは巡礼者の心性を知る上で、戦死者の墓へ赴く巡礼や戦場ツアーはもう少し研究されてもしかるべきとも思っている。

1) 本稿では「戦場巡礼」と「戦場ツアー」という言葉を使う。なお、戦場巡礼の研究を行っているウォルター氏は「戦争墓巡礼」war grave pilgrimageと「戦場ツアー」battle field tourという言葉を使っている。用語については今後の検討課題としたい。

【参考文献】

Mark Connelly, *The Great War Memory and Ritual: Commemoration in the City and East London 1916-1939*, Woodbridge, 2002.

Penelope Curtis, "The Whitehall Cenotaph: an accidental monument", *Imperial War Museum Review*, No. 9, 1994.

Alex King, *Memorials of the Great War in Britain: the Symbolism and Politics of Remembrance*, Oxford, 1998.

David W. Lloyd, *Battlefield Tourism: Pilgrimage and the Commemoration of the Great War in Britain, Australia and Canada, 1919-1939*, Oxford, 1998.

Menin Gate and Last Post: Ypres as Holy Ground, Dendooven, 2001.

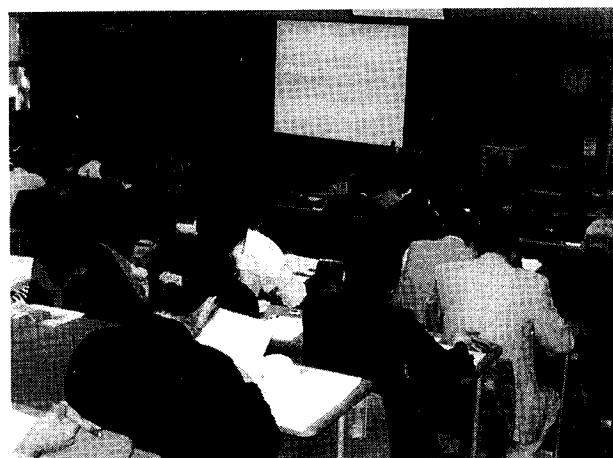
Tony Walter, "War Grave Pilgrimage", Ian Reader and Tony Walter (eds.), *Pilgrimage in Popular Culture*, Basingstoke, 1993.



1日目 会場風景



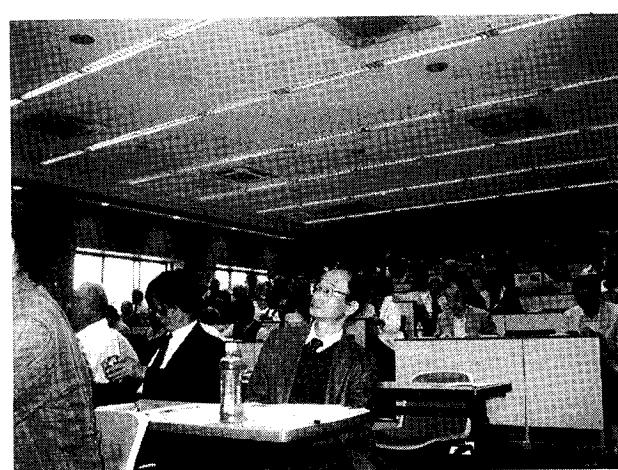
内田 九州男氏挨拶



浅川 泰宏氏報告



1日目 シンポジウム



2日目 会場風景



吉田 正広氏報告